

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870397

研究課題名(和文) 明治維新前後の日伊交流史 蚕種貿易と外交関係を中心に

研究課題名(英文) The Italo-Japanese Relations before and after the Meiji Restoration -Centering on the silkworm-egg trade and diplomacy-

研究代表者

BERTELLI Antonio (BERTELLI, Antonio)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60598431

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：この3年間で、幕末・明治初期の日伊交流史に関する研究を大いに進めることができた。この研究の最終目的は幕末・明治初期の日本におけるイタリアの役割の重要性を理解し、明らかにすることである。イタリア(ミラノ、トリノ、ローマなど)や日本(東京、横浜など)で数多くの日本・イタリア関係未刊史料を発見し、収集することができた。これらの資料を学術専門書(現在執筆中)、研究論文、研究発表や講演会の準備に利用することができ、今後の研究課題にも大変役立つものもあると考えられる。

研究成果の概要(英文)：During the last three years, I could carry on my research about the Italo-Japanese relations during the Bakumatsu and the first years of the Meiji era. The ultimate purpose of this research is to understand and clarify the importance of the role of Italy in Japan during those years. In Italy (Milano, Torino, Roma, etc...) and in Japan (Tokyo, Yokohama, etc...) I could find and gather many unpublished documents closely related to the two countries. Successively, I used some of those documents to write a specialized book (work in progress) and some articles and presentations and various lectures, and some of them will be extremely useful for the research I am planning to do in the next three years.

研究分野：幕末・明治初期における日伊交流史

キーワード：イタリア 蚕種商人 幕末・明治期 ジャーコモ・ファルファラ ピエトロ・フェ 駐日イタリア公使

1. 研究開始当初の背景

本研究は**幕末・明治期における外交・貿易関係を中心とした日伊交流史**に関するものである。申請時(2012年10月時点)の背景は以下の通りである。

幕末・明治初期に日本とイタリアの間に貿易関係が隆盛を極めていたことを知っている人は非常に少ない。両国の歴史教科書にも、幕末・明治史に関する専門的研究にも、この事実に触れた記述はほとんどない。

1840-50年代頃から、ヨーロッパで「**微粒子病(又はペプリン)**」という蚕の病気が猛威を振るい始めた。この不治の伝染病に冒された蚕の絹糸生産力は著しく低下し、養蚕製糸業に大きく依存していたイタリアやフランスの経済は致命的な打撃を受けた。したがって、前例のない規模の国際的経済危機を乗り越えるために、ヨーロッパの養蚕家は未感染の地域で無病、そして良質の蚕種を仕入れざるを得なかった。このような事態から、「**蚕種商人**」という全く新しい職業が生まれた。この活動的な商人たちは微粒子病の感染エリアが拡大し続けると共に、徐々に遠い国、トルコ、ペルシャ、中国、そして最後に日本にまで足を踏み入れることになった。

日本の蚕種の質は極めて良好だったため、1860年代に日伊蚕種貿易の規模は徐々に拡大した。**日伊修好通商条約**が締結されたのは1866(慶応2)年8月であるものの、イタリア人蚕種商人は1863(文久3)年から渡日していたとみられる。1867(慶応3)年から、イタリアと日本は本格的に国交を始め、公使と領事が日本に派遣されると共に、毎年夏と秋にかけて、日本を訪れるイタリア人蚕種商人が急激に増加した。

1860年代後半からこの商売の規模は目覚ましい成長を見せた。蚕種の輸出額は**日本の輸出総額の23%以上**を占める年もあり、そのおおよそ7-8割はイタリア市場に流れるものだった。この貿易関係は養蚕製糸業に依存するイタリア経済を支えながら、日本が近代化を成し遂げるために必要としていた膨大な収入を確保させていたため、両国にとって極めて有益で、重要なものだったとみられる。この貿易は微粒子病を克服するための予防策が普及し始めた1880年代初頭まで続いたが、**この20年間は正に日伊交流の黄金時代**と言っても過言ではない。

蚕種貿易が盛んだったため、この時代には大勢のイタリア人が来日していた。確認されたおおよそ**150人の蚕種商人**以外にも、彼らの活動を後援するために**明治政府と交渉していた駐日イタリア公使や領事**もイタリア政府によって日本に派遣された。その役割は極めて重要である。また、極東におけるイタリアの権威を高めるべく、イタリア政府は定期的に日本に軍艦を派遣していたため、訪日する**軍人**も少なくなかった。これらの人物は明治維新で大きな変化を迎える日本を注意深

く観察し、書簡、日記、覚書などを書いたり、書物を刊行したりして、我々に「**外から見た日本**」に関する多くの興味深い情報を提供している。これらの情報を発表して、当時のイタリア人の「**日本観**」を意識しながら、**駐日外交官、蚕種商人、軍人の活動と役割を歴史的に検証**することによって、イタリアは日本の欧米化にどのような役割を果たしたかについて追究する。

2. 研究の目的

幕末・明治初期に日本へ渡ったイタリア人に関する既存研究は断片的なものが多い。明治期における日伊交流史に関する徹底的な先行研究は主に文化交流(お雇い外国人として来日した芸術家などとその活動、工部美術学校の歴史など)を中心としたものである。本研究は、美術・文化をめぐる交流よりは主に幕末・明治期に来日した外交官の役割と蚕種商人の活動、そしてイタリア軍人・商人が遺した日本に関する未刊の記録、その特徴や歴史的重要性について論じることを目指す。申請時に、この研究の主な目的は以下のとおりであった。

第一に、申請者は現在、2011(平成23)年から2013(平成25)年3月まで、日本学術振興会の科研費(若手研究B)の援助を受けながら行ってきた研究(博士論文、学術雑誌に刊行した論文や記事)をまとめ、まだ刊行されていない幕末・明治初期における日伊外交・貿易関係に関する**学術専門書**の執筆を進めている(出版依頼は大阪の出版社である「清文堂出版」から受けている)。イタリア側、そして日本側の一次資料(主に未刊資料)の徹底分析によって、幕末・明治期における日伊関係の知られざる事実を浮き彫りにしたい。具体的には、以下の疑問点を解明することを目指す。

蚕種貿易、並びに初代の駐日イタリア外交官の努力と活動は明治政府の決断と日本の近代化プロセスに如何なる影響を及ぼしたのか。

幕末・明治期の日本で、イタリア外交官は他国(主にフランス、イギリス、アメリカなど)の公使・領事と如何なる関係を持っていたのか。また日本外交史の中で、他の欧米諸国との比較に於いて、イタリアの存在はどのように位置づけられるべきなのか。

また、学術専門書の付録として、年表、及び最重要の未刊史料の和訳文を収録する予定である。

第二に、数年前イタリアで発見した**イタリア海軍大尉カルロ・グリッロ(Carlo Grillo)**の日本から母へ宛てた数々の**書簡(私文書・A4サイズでおおよそ130枚)**に関する調査を進めている。これらの書簡は1871-72(明治4-5)年の横浜居留地のイタリア人コミュニ

ティールなどに関する貴重な情報を含むため、主に日伊交流史を学ぶ学者に大いに役立つのではないかと見込まれる。申請者は2012年10月20日に、慶応大学で開かれたイタリア学会の第60回研究大会で、この未刊の一次資料の内容と特色、並びにその歴史的重要性について初めて研究発表を行うことができた。その際に得た様々な助言、そしてカルロ・グリッポの末裔が提供する貴重な情報や史料を活用しながら、論文を執筆する予定である。

第三に、筆者は、初代駐日イタリア公使ド・ラ・トゥール伯爵の末裔の好意により、新たに日本関係の未刊イタリア史料を入手できた。この史料はイタリア蚕種商人の**ジャコモ・ファルファラ (Giacomo Farfara)** が書いた「Giornale di un viaggio nel Nord del Giappone」(「北日本旅行日誌」)である。この日誌(手稿・全57頁)は、行動的な商人ファルファラが戊辰戦争時、1868(明治元年)と1869(明治2)年にかけて行った東北や蝦夷地(北海道)における旅行の経緯をまとめたものであり、極めて貴重な史料である。この未刊史料を検証・公表することによって、その歴史的価値を明らかにする。

本研究の学術的な特色は以下の通りである。**第一に**、忘却された幕末・明治期の日伊交流史を書くために不可欠である多くの**一次史料**(外交官の報告書、軍人や商人の書簡や日記など)はまだイタリアや日本の古文書館や資料館、そして個人の書庫で眠っている。入手困難な史料は多々あると思われるが、全く新しい史料を発見、そして分析することによって、**ゼロから歴史を書き、徐々に日伊交流史の知られざる側面を解明していく**ことは本研究の醍醐味である。

第二に、本来の日本外交史は主に英国・米国・フランスの活動を中心に扱うものである。駐日イタリア外交官の独特な立場を観察しながら理解してみると、視野を広め、幕末・明治期の**日本外交史を新たな観点から見る**ことができるようになると考えられる。

第三に、不明な点の多い日伊関係の原点とみなすことができる、幕末・明治期の日本におけるイタリアの立場を明らかにすれば、**20世紀の日伊交流・外交史の性格をより深く理解**できるようになるのではないかと考えられる。

3. 研究の方法

2016(平成28)年は、日伊修好通商条約締結の150周年に当たる。したがって、申請者にとって、2013(平成25)年度から2015(平成27)年度までの3年間は極めて重要で、この期間中に効率よく、そして有意義に研究活動に取り組む必要がある。

申請研究の目的を達成するために、主に一

次史料の収集と分析が最も重要である。申請研究の第一段階は念入りに史料調査を行うことによって、当時の実態を再現できる未刊史料を集めることである。集めた史料を実証的に比較検証しながら、日伊交流史の知られざる側面を解明する。

申請時の研究計画、そして研究方法の具体的な説明は以下のとおりである。

[平成25年]

平成25年度中に、日伊交流史に関する**学術専門書の執筆計画**を極力具体化する予定である。

今までに行った研究をまとめながら、

2011-12(平成23-24)年度にイタリア(ローマ、トリノ、ヴェネツィアなど)と日本(東京)で新たに収集してきた史料を活用し、幕末・明治初期の日伊外交・貿易関係(主に駐日イタリア外交官の活躍、居留地のイタリア人コミュニティ、そして当時の日本におけるイタリアの立場と役割)について論じる専門書の執筆を進めている。執筆を依頼した出版社は学術専門書を中心に刊行する大阪市中央区所在の「**清文堂出版**」である。出版は2013(平成25)年度中に予定されている。

この専門書の完成度を高めるために、幕末・明治初期の日本を訪れていたイタリア外交官、蚕種商人、軍人などが遺した記録(主に書簡、日記などの一次史料)をイタリア・ローマにあるイタリア外務省歴史外交資料館(Archivio Storico Diplomatico del Ministero degli Affari Esteri)、イタリア国立古文書館(Archivio Centrale dello Stato)、イタリア海軍歴史資料館(Ufficio Storico della Marina Militare)などで調査・収集する必要がある。また、日本国内(外務省外交資料館、国会図書館、東京大学資料編纂所、横浜開港資料館など)でも更なる調査を行わなければならない。その際、本研究の遂行に必要な史料を収集すると同時に、将来に新たな研究を促すための未刊史料の発見を目的とした調査を行うことも可能である。

また、初代駐日イタリア公使ド・ラ・トゥール伯爵(Conte V.S. De La Tour, 1827-1894)そして第二代駐日イタリア公使フェ・ドステイアーニ伯爵(Conte A. Fè D'Ostiani, 1825-1905)の末裔及びその家族(イタリア在住)が提供する貴重な情報は学術書執筆に欠かせないものであり、これらの史料についても、収集に向けて鋭意調査をする必要がある。

[平成26年度]

この年度においては、**イタリア王国海軍大尉カルロ・グリッポとその書簡**について、この史料の特色と重要性及び**カルロ・グリッポの「日本観」**を分析した学術論文の執筆活動に取り組む予定である。論文の執筆に当たっては、特に上記書簡に関する研究発表(2012年10月20日)を通じて得た助言と批判を十分に活かす予定である。2011(平成23)年度に、申請者はトリノでカルロ・グリッポの末裔とその家族に面会できた。その際、グリ

ッロ家に関する詳細な情報を聞き、関連する写真、グリッコが日本で入手したと見られる物品を拝見することができた。2013-2014（平成 25、26）年度中に、再度ピエモンテ州アレッサンドリア市（Alessandria）にあるグリッコ家の別荘を訪れ、カルロ・グリッコとその家族に関する新たな一次史料を閲覧する。平成 26 年度中にグリッコの日本からの書簡を日本語に翻訳しながら、本文に註を付ける作業を進める。将来は、書簡の和訳と学術論文を一冊の本にまとめた形で研究成果を公表する。

[平成 27 年度]

この一年で、2013-2014（平成 25 - 26）年の目標を無事に達成できれば、**ジャーコモ・ファルファラの「北日本旅行日誌」**の研究に全力を注ぐ。ファルファラに関する情報は極めて少ないので、平成 25 年、26 年、27 年に、イタリアで史料調査を行う際、この人物に関する調査も行い、可能であればその子孫の所在に関する手掛かりを集め、ファルファラ家の書庫に日本に関する重要史料が眠っている可能性を確認する。ジャーコモ・ファルファラに関する情報を収集すると同時に、可能であれば、国内外の学会・研究団体において「日本北部旅行日誌」に関する研究発表を行い、その場で得た助言と批判を基に、論文の執筆を進める。

4. 研究成果

学術専門書に関しては平成 27 年度までに完成する予定だったが、家庭の事情、招待講演の準備、そしてこの 3 年間に新たに発見した史料に含まれた重要な情報の整理と分析に予想以上の時間が必要だったことにより、出版が 2-3 年ほど（平成 29-30 年度に）延期される予定である。執筆活動は遅れているものの、続いている。また、家庭の事情により、平成 25 年 9 月に計画していたローマ出張（AISTUGIA - 伊日本研究会における研究発表のため）を急遽取り消すことになった。但し、欠席にも拘らず AISTUGIA によって刊行された著書に、発表の内容を論文にまとめて、掲載することができた（研究業績 ）。

イタリア海軍大尉カルロ・グリッコが 1871 - 72 年にイタリア軍艦「ヴェットル・ピザーニ」号で日本を訪れた際、母へ送っていた書簡（以前イタリアで発見したもの）を分析し、紹介することができた。グリッコ家（トリノ在住のカルロの末裔）に得た貴重な情報や資料（書簡、日誌、写真、カルロが当時日本で購入した様々な物品）を活用しながら、書簡の内容およびその他の公文書・私文書をまとめることができた。要点を部分的に翻訳し、この私文書の歴史的重要性を浮き彫りにした研究を予定通り、イタリアでも、日本でも活字にすることができた（研究業績 ）。を参照）。

また、予定通りイタリア商人ジャーコモ・ファルファラの『日誌』を日本、そしてイタリアで、学会発表（研究業績 ）、 という形で初めて公開することができ、他の研究者や専門家から得た質問や助言を重宝することができた。日誌、およびその他の史料によれば、ファルファラの日本北部における旅行の目的は戊辰戦争時（1868 年秋）に盛岡藩に武器と弾薬を運ぶことであった。また、彼はフランスの元軍事顧問団員であった士官ジュール・ブリュネ（Jules Brunet）と親しく、船でフランス下士官 3 名を宮古に運ぶ任務もあった。更に、『日誌』によると、ファルファラは榎本武揚との会談に応じることもあった。

したがって、彼は単なる商人ではなく、彼の任務には政治的目的もあったという事実、そして『日誌』の歴史的重要性を浮き彫りにした。

また、イタリア・フランスにおける史料収集を目的とした調査を行い、その際に収集できた史料を用いて、学術論文の作成に従事した。この論文（業績 ）は『イタリア学会誌』第 66 号（2016 年 10 月に刊行予定）に掲載されることが決定された。

「結論」より

『日誌』という新しく発見された史料を一読するだけで、以前蚕種商人としてしか知られていなかったファルファラは、単なる商人ではなかったことが明らかになる。謎の多い任務を背負った冒険心豊かなイタリア商人ファルファラが書いた『日誌』は、同時代の他のイタリア人による日本関係史料と異なり、江戸や横浜ばかりではなく、当時までイタリア人が足を踏み入れたことのない地域への旅を中心としている。この史料はまた、明治初期の日本、そして戊辰戦争におけるイタリアの立場の知られざる側面に光を投じるものである。特に、ファルファラはブリュネや榎本のような主要人物に直面する唯一のイタリア人であろう。

『日誌』は非常に読みやすく、まるでフィクションのように、読者を惹きつけ、最後まで退屈させないといった特徴を有し、極めてユニークで例外的な一次史料であると言える。但し、この『日誌』の秘密や謎はまだすべて解明されておらず、この興味深い史料の魅力を更に引き出すために、研究を継続する必要があると考えられる。」

これ以外にも、イタリア公使ド・ラ・トゥール伯爵およびイタリア人蚕種商人らがどのように新潟開港問題に対面したのかという主に未刊公文書（書簡など）を活用した研究（研究業績 ）、 ）にとりかかった。これらの研究において、イタリア公使が新潟開港をめぐる、明治政府と如何なる形で交

dawn of Italo-Japanese diplomatic relations (1860-1880)」、理化学研究所、宇宙観測実験連携研究グループ EUSO チーム『理研セミナー』、於：理化学研究所、埼玉県和光市、2015年3月19日

(口頭発表) (口頭発表) Bertelli Giulio Antonio, *Il "Giornale di un viaggio nel Nord del Giappone" di Giacomo Farfara: testimonianza inedita di un commerciante italiano ai tempi delle guerre Boshin (1868-69)*[イタリア商人ジャーコモ・ファルファラの「日本北部旅行日誌」という戊辰戦争時代(1868-69年)の未刊記録について]、"XXXIX Convegno AISTUGIA di studi sul Giappone"[第39回伊日本研究会大会]、2015年9月24, 25, 26日(於：Università di Catania (Italia), Dipartimento di Scienze Umanistiche [イタリア共和国、カタニア大学、人文科学科])

ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ「戊辰戦争時(1868-69)に北日本を旅するイタリア人商人ジャーコモ・ファルファラの未刊日誌」、イタリア学会第63回大会、2015年10月17日(於：学習院大学目白キャンパス)

(口頭発表) Bertelli Giulio Antonio, *Il suono della lingua giapponese dai resoconti degli italiani in Giappone tra la fine del periodo Edo e i primi anni del Meiji* [江戸末期と明治初期に来日したイタリア人の記録に現れる日本語についての記述]、Bertelli Giulio Antonio, "Giornata degli Italianisti 2015"[2015年イタリア語研究者の集い]、2015年11月15日(於：イタリア文化会館 東京)

(口頭発表) ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ「日伊交流の暁(1866-1880)～幕末・明治初期の日本におけるイタリアの立場と役割～」、第427回イタリア研究会例会、2016年1月26日(於：イタリア研究会 東京)

[図書](計 3件)

(著書・共著) Bertelli Giulio Antonio, *L'epistolario inedito di Carlo Grillo (1846-1906), un giovane ufficiale di Marina in Giappone nel primo periodo Meiji (1871-72)* [カルロ・グリッロ(1846-1906)の未刊書簡—明治初期(1871-72)の日本を訪れる若い海軍将校]、in Matilde Mastrangelo, Luca Milasi, Stefano Romagnoli, *Riflessioni sul Giappone antico e moderno* [古今の日本に関する考察]、(pp. 197-222), Aracne Editrice, Roma, 2014 (イタリア語文)、ISBN 978-88-548-7939-3

(著書・共著) ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ「新潟を訪問するイタリア人蚕種商人と戊辰戦争(1868年)駐日イタリア外交官の活躍を中心に」、第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集編集会編『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性—第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集』(873-883ページ)、ココ出版、2014年11月、ISBN 978-4-904595-52-7

(著書・共著) ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ「一八六八年の新潟開港問題と駐日イタリア外交官」、荒武賢一朗、太田光俊、木下光生編『日本史学のフロンティア 1—歴史の時空を問い直す』(261-285ページ)、法政大学出版局、2015年1月、ISBN 978-4-588-32131-3

6. 研究組織

(1)研究代表者
ベルテッリ アントニオ (BERTELLI ANTONIO)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：60598431

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：